百々裏話（29）

おもて　あきら

【観世（京）がかり・金春（大和）がかり】

観世流・金春流など、なんとか流という言い方が行われる以前に、それとほぼ同じ意味内容をも持つ言葉として使われていたのは、なになにがかりの言い方であった。

「かゝり」は世阿弥の愛用語の一つであって、彼の伝書にはその用例がすこぶる多く、語義も極めて多岐にわたっている。それについては、連歌の「かゝり」と合せて考察された能勢朝次博士の論考「かゝりの芸術的性格」（『能楽芸道』所収）に詳しいが、芸風の意に使用されている用例も多く、中には、『申楽談儀』の

○四方の嵐も音そへて……上より言ひておとす也。喜阿がゝり也。此ふし、喜阿がかり謡ふ人は猶好むべきか。

など、固有名詞に「かゝり」を添えた例も存在する。これらは、話が音曲関係の場合であり、もともと「かゝり」が音曲上の用語として使用されることの多い語であることを考慮すると、能勢説の如く、乙鶴的曲風・喜阿的曲風と解するのがより正確ではあろうが、

○乙鶴、此流ヲ亡父ハ習道アリシ也。

と『五音』にあるのを参照すると、乙鶴流とか喜阿弥流とか言い替えても差支えない所である。一方また

○近江のかゝりは、立止りてあっといはする所をばつゆ程も心にかけず、たぶ〳〵と、かゝりをのみ本にせし也。……近江の風体かくのごとし。（申楽談儀）

の「近江のかゝり」は、中に助詞「の」が介在していて完全な熟語ではないが、後に「近江の風体」とある点から見ても近江猿楽の芸風の意に相違なく、近江流に近い語義と言えよう。こうした「かゝり」の語の用法から推して、特定の座の芸風や芸統をなになにがかりの形で表現する下地は、世阿弥の頃に既に存在していたと言い得るようである。だが、世阿弥の伝書にも禅竹の伝書にも、現実にはそうした用例が出て来ないのである。

金春禅鳳の芸談を記録した『禅鳳雑談』になると、

金春がゝりの能はさう（草）にて候。

○京がゝりのうたいは、つぶ〳〵と念仏をくり候様に行候。金春がゝりは、さやうにめなり候はで、あさふり（浅瓜）をくい候やうにかろくゆき候。

○つゞみ、其うたいのやうにうつべし。京がゝりはきざみにちからを入て、かしらのごとし。

など、京がゝり、金春がゝりの言い方が見えている。京がゝりに対応する形の大和がかりも、金春がゝりに対応する観世がかりも、用例こそ見出だせないが、同じく『禅鳳雑談』の語られた永正（一五〇四―一五二一）頃には使用されていたと見てよいであろう。少し時代は下るが、両語ともに左のような形で使用されている。

○返々くつかひの頭・ほどの頭・中の頭大事也。観世がゝり是を本とす。余の座にはなし。打やう秘事。（永禄十二年奥書似我与左衛門国広伝書）

○舞の内を打入事、観世がゝりには老松・放生川・白楽天、是三番の能ならではなし。打入所は……二段めなり。猶口伝在之。又金春は一段めに……（天正十九年細川幽斎自筆太鼓伝書）

○遊屋の囃、幽玄のつよき位也。曲舞のかゝり、大和がゝりは打きらず、京がゝりは打切てうたひいだす也。舞のかかりも

大和がかりは……（八帖花伝書巻七）

○高砂、当流はくまでをもつ。大和がかり其外余の座にはゝきをもつ事、不審に候（八帖花伝書巻六）

このうち、観世がかり、金春がかりが、観世座風・金春座風の意で、現在の観世流・金春流に相当することは言うまでもあるまい。京がかり、大和がかりは、観世座が主として京都で、金春座が主として大和で活躍していたことから生じた名であり、京がかりが金春がかりに対応し、大和がかりが当流に対応して使用されている前掲の引用文の形から見ても、京がかり即観世がかり、大和がかり即金春がかりと解していいのであるが、宝生がかりや金剛がかりをその中に含めて考えるべきではないかとの疑問が伴ないそうである。

だが、室町時代の宝生・金剛両座は、大和猿楽四座の一つとしては同格であったが、実際の勢力に於いては、観世や金春とは比較にならないほど微弱であったらしい。室町末期の能楽伝書類を見ても、能の芸風に関して、宝生や金剛の名を観世や金春と同列に対置せしめている記事は皆無といってよい程である。前回「なになに流」について考察した際に、観世流と金春流の二つだけを問題にし、宝生流や金剛流については全然言及しなかったのも、そうした実状によるのである。勢力が微弱なため世間からは観世座の一部と見なされていたという明徴があるのなら、宝生がかりを京がかりや観世がかりに含めて考えることも許されようが、観世大夫元忠（宗節）の弟が宝生大夫を嗣ぐ以前の宝生座が、どの程度観世座と近い関係にあったかも不明であり、室町中期の宝生座の活動の本拠が京都であったかどうかもわかっていないのである。大和がかりの場合は、八帖花伝書が「当流」（観世流）に対応する形として、大和がかりと金春がかりの両方を差別なく使っていることからみて、即金春がかりであることが確実と思われる。但しこの金春がかりには、金春座だけではなくて、同座から派生した大蔵・宮王などの諸座の芸風も含めていると考えることは可能であろう。

ところで、観世がかりにせよ、それと全く同意と見なされる京がかりにせよ、意味する所は観世座的芸風、観世座の演じ方のことであって、現在の「観世流」のように、能のある分派そのものを意味することは無い。これは「かかり」の語義から言っても当然のことであり、分派そのものを意味する場合には、「観世座」という本来の言い方があり、また単に「観世」と言うことで間に合ったからでもある。従って、なになにがかりの言い方がなんとか流の言い方と完全に重なり合うのではなくて、「…流」の語義のうちの芸統を意味する用法と重なる言い方が「…かかり」であると理解すべきであろう。逆に、観世座と観世がかりの両方の語義を兼ねた言葉として室町末期から「観世流」が生まれたとも言えるようである。金春がかり、大和がかりの場合も同様である。

さて、京がかり、大和がかりとか、観世がかり、金春がかりとかいう言い方は、江戸初期までは使用されていたが、江戸中期以後にはほとんど使用されていない。なんとか流という言い方が流布してきたのと、観世・金春の並立時代から四座一流の対抗期へ移ったことが原因であろうが、同じ「かかり」のつく言葉で、室町末から発生し、江戸時代になって広まって来たのが上がかり、下がかりの言い方である。この両語については、既に紙数が尽きているので、次回に考察することにしたい。

（39・5・22）